



夏、潜り漁始まる！

岩ガキは、にかほの夏を代表する味覚。漁師たちは息を止めて10mも深く潜水。岩ガキを獲って波間に浮かぶタライに持ち帰る。息を整えて再び海中へ...

7月3日、漁が解禁した象潟・金浦の海岸からは、潜り漁の船があちらこちらに見られました。

主な内容

- 北東北インターハイ……………P 2～3
- 後期高齢者医療保険……………P 4
- 集中豪雨被害・放射能測定ほか…P 6～7
- まちの話題……………P 8～9

vol.140

2011

7.15

<http://www.city.nikaho.akita.jp>

がんばろう東北

白瀬南極探検隊100周年記念特集

その拾四



前列右からディビッド教授、白瀬、
 ドグラス・モーション (オーストラリアの南極探検家)

郵便で行われ、南極探検後援会の大隈重信にも届けられていましたが、朱書きで「大隈伯に送るな」という暗号文書もあったようです。当時の日本政界の争い、大隈と桂太郎、山縣有朋などの藩閥争いが、白瀬隊にも影響を及ぼしていたことが伺えます。

一方、そのころ日本では、大隈が5万3千円分（現在の価値で約5、800万円）の、「南極探検事業国庫補助申請書」を帝国議会に提出し、満

場一致で衆議院を通過します。しかし同じく藩閥争いの影響か、補助金の交付はありませんでした。

5日にオーストラリア政府は日本の南極探検船であることを認め、上陸が許可されます。しかし、最初のキャンプ地がシドニー港の要塞前だったため、有色人種への差別・偏見がまかり通っていた当時、シドニーの各新聞は、軍事スパイではないかと書き立てます。これに異を唱えたのが、シドニー大学の地質学者エッジワース・ディビッド教授でした。彼はイギリス生まれで、オックスフォード大学で学び、シドニー大学教授に就任。シャクルトン南極探検隊に地質学者として同行（一九〇七）しています。彼が「白瀬隊は結氷の厚さに無念の涙をのんで引き返してきたが、解氷期を待つて、再挙を企てる勇氣ある探検隊のメンバーである」と地元紙に発表したことで、市民は白瀬隊に敬意を払うようになります。

庭園を造つたため、市民から好感をもたれ、次第に来客者が増えたそうです。また、彼らに同情を寄せる人も現れ、隊員が自宅に招待されることもあったようです。

シドニーでのキャンプ生活

未知に挑む 南十字星のもとに

白瀬記念館イベント

企画展

「南極探検史に遺る 白瀬中尉とディビッド教授」

8月10日まで開催！

白瀬がディビッド教授に贈った名刀「陸奥守包保」が13年ぶりに展示されています。オーストラリアン博物館からお借りしている貴重な資料です。

講話会

参加・入館無料。申し込みは電話で！
 定員 40名

▼8月1日(月) 午後2時～3時

講師 池田吉男氏（秋田県銃砲刀剣類登録審査委員）

▼8月9日(火) 午後4時～5時

講師 コリン・マクレガー氏（オーストラリアン博物館学芸員）

白瀬日本南極探検隊
 100周年記念事業推進事務局
 白瀬南極探検隊記念館
 〒981-3765

